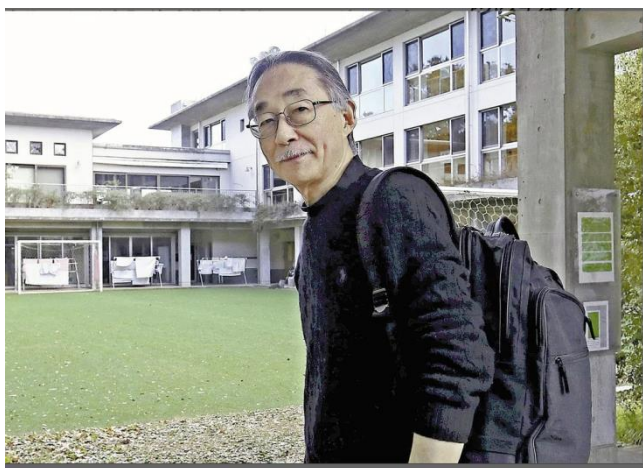


## 〔時代の証言者〕 終末期を支える 山崎章郎（1） 尊厳ある生と死 追求

2020/04/15

◇72歳



病院での悲惨な死の実態を告発して反響を呼んだ著書『病院で死ぬということ』の出版から30年。医師の山崎章郎さんは、あるべき終末期ケアを求めて、道を切り開いてきた。本格的な超高齢社会を迎えた今こそ聞きたい、先駆者がたどり着いた答えとは――。  
（調査研究本部 林真奈美）

◇

住み慣れた街で、最期まで生きて、逝きたい――。多くの患者さんご家族のそんな願いをかなえたいと、東京都小平市で在宅向けの緩和ケア専門診療所「ケアタウン小平クリニック」を開いて16年目を迎えます。志を同じくする看護・介護職とチームで活動しています。それぞれの事業所が集まった拠点が「ケアタウン小平」です。

元々は外科医で、一般病院で15年間働きました。当時、がんの告知はタブー。患者さんは自分の病名も病状も知らされず、過剰な延命医療に苦しみながら、孤独の中で人生を終えた。そんな状況を変えたいと、『病院で死ぬということ』（主婦の友社、文春文庫）を書いたのです。

あの頃と比べると、終末期医療は大きく様変わりしました。病名告知は当然になり、最期をどう過ごすかの選択は患者本人に委ねられています。延命医療は望まない、自宅で死にたい、という人も増えています。

にもかかわらず、住み慣れた場所で平穏に逝くことは難しい。支える仕組みが不十分なのです。多くの患者さんが最終局面では入院し、病院で医療機器に囲まれて辛（つら）い時間を過ごした末に、亡くなっています。

「2025年問題」は目前です。団塊の世代が75歳を超え、老衰や病気で亡くなる人が急増する。病院では受け入れ切れず、「死に場所難民」の続出が懸念されます。一方、死が避けられない人の救急搬送が増えれば、真に必要とする人が救急医療を受けられなくなる恐れもある。

《高齢化の進展に伴い、年間死亡者数は2019年の138万人から25年には152万人、ピークの40年には168万人に達すると推計される》

問題の解決には、人生の幕を閉じる場所を、それまで暮らしてきた自宅や介護施設に移していけばいいのです。

僕は、「尊厳ある生と死」を追求して病院からホスピス病棟に移り、さらに、ホスピスでのケアを地域に届けたいと、在宅緩和ケアに転じました。つまり「在宅ホスピス」ですね。

これまでに、約2500人の人生の最終章に同行しました。適切な支援があれば、平穏で尊厳ある最期を迎えられることを、その方々に教えられました。

2025年問題は、社会問題であると同時に、あなた自身の最期をどうするかという個人の問題です。この連載が、皆さんがそのことを考えるきっかけになれば幸いです。（緩和ケア医）（この連載は、月～木曜日と土曜日に掲載します）

◇やまざき・ふみお 1947年、福島県生まれ。緩和ケア医、ケアタウン小平クリニック院長。千葉大医学部卒。同大病院第一外科、千葉県八日市場市立病院消化器科医長、聖ヨハネ会桜町病院ホスピス科部長を経て、訪問診療に従事。ホスピス・緩和ケアの普及啓発に取り組む。

写真＝「2025年問題は、あなた個人の問題です」と話す山崎さん（東京都小平市の「ケアタウン小平」で）＝鈴木竜三撮影